

令和 4 年 6 月 7 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K03205

研究課題名(和文) 東北地方における庶民信仰の実証的研究

研究課題名(英文) Empirical study of common people's beliefs in Tohoku district

研究代表者

荒木 志伸 (Araki, Shinobu)

山形大学・学士課程基盤教育機構・准教授

研究者番号：10326754

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：従来から進めてきた立石寺参道の石造文化財調査では、新たな発見がいくつかあった。特に磨崖供養碑に関して、せみ塚付近の磨崖供養碑に「上山」の地名を発見し、信仰圏の広がりに関する新たなデータが得られた。弥陀洞地区で「市村屋」と屋号が刻まれたものを山内で初確認し、建立者や庶民信仰の実態につながる可能性がある。この屋号については多数確認されている松島・雄島周辺との比較検討を行い、出羽三山をはじめとした各地の霊場との比較分析もおこなった。一連の研究成果については、2018年に東北大学で開催された国際シンポジウム、2019年8月に日本山岳修験学会・第40回大会等で発表すると共に、論文誌上でも報告している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

立石寺をはじめ、各霊場内に所在する石造文化財は、文献史料のみでは解明が難しい庶民信仰の実態に迫ることのできる貴重な歴史資料である。本研究では立石寺、松島、出羽三山等で約2000基の石造文化財を調査し、形式・石材・銘文データを得た。膨大な「モノ」資料の実践的研究から、地域の歴史解明が可能となったといえる。また、霊場・立石寺の歴史的景観の復元も可能となってきた。例えば松尾芭蕉が元禄2年(1689)に立石寺を訪れ「閑さや岩にしみ入る蝉の声」と詠んだとき、山内には約30基の磨崖供養碑と約10基の石塔が造立されていた様相が判明した。各霊場の調査成果は、地域の観光資源として今後その活用も期待される。

研究成果の概要(英文)：Archaeological survey of stone cultural properties was conducted at Risshakuji Temple. One notable result was the discovery of the place name "Kamiyama" and a "Ichimuraya" on an inscription carved into the rock. In order to compare with Risshakuji Temple, numerous sacred sites, such as Matsushima Zuiganji Temple and the three mountains of Dewa, were visited. The results were presented at symposiums in Japan and abroad.

研究分野：日本考古学

キーワード：石造文化財 立石寺 庶民信仰 松島 出羽三山 信仰 銘文

1. 研究開始当初の背景

近年、歴史学分野では日本列島内で均一的にとらえられてきた歴史観への反省として、地域的特色を解明し、多様な文化の存在を明らかにする研究が活発である。本研究が対象とする立石寺は、地域の庶民信仰の核となる霊場でありながら文献史料も乏しく、本格的な検討がなされずにいた。まして考古学的な研究は、皆無に等しい状況であった。

こうした問題意識から、研究代表者は立石寺山内に広く分布する近世期の石造文化財の調査を進めてきた。本研究を開始する段階において、その全体の約8割の調査が終了していた。ちなみに立石寺の石造文化財は、その形式分類と年代の検討から、磨崖供養碑 崖面に直接刻むもの・256基 は近世初期～中頃、石塔類 墓石や供養塔・844基 は近世中頃～末頃、石燈籠 113基 は近世後期以降といった変遷していることを明らかにした。それぞれ紀年銘をはじめ、戒名、供養願文、地名、施主名などが刻まれている。その分析から、立石寺は大永元年(1521)に一山焼失後、近世中頃まで山形盆地周辺の人々が深く関与しつつ復興を遂げた、地域密着型の霊場であったことが浮かび上がってきた。

一方で調査開始から一定の期間が経過し、銘文解読に関わる器材の進化も含め、再調査が必要なものも多いとの意識が強くなった。特に、磨崖供養碑に関しては、立石寺山内でも古い紀年銘を持つものが多く、改めて銘文をはじめ、微細なデータを取得する必要性を強く感じるようになった。さらには立石寺のみの検討にとどまらず、他の霊場と比較検討することにより、より霊場としての特徴を鮮明に描き出す視点も必要であると考えた。以上のことから、松島の雄島・瑞巖寺や出羽三山等、現地踏査を含めて比較分析をおこなうと共に各地の霊場を踏査し、それぞれの石造文化財の特徴や庶民信仰の在り方を検討することとした。

2. 研究の目的

立石寺をはじめとする東北地方の霊場に存在する石造文化財を悉皆調査し、形式・石材・銘文内容等のデータから、庶民信仰の実態を解明することが研究目的である。

立石寺の石造文化財については、いつ、だれが、建立したのかという、当初の課題は明らかになってきた。一方で、建立者は地域の土族なのか、あるいは豪農なのかなど、具体的な階層は不明である。また、近世初期における立石寺の復興過程において、山内に石造文化財が出現する点も注目される。しかし、当該期の文献史料の乏しさもあり、その背景については未解明である。どのような宗教勢力が、いかにして復興を主導したのかなど、石造文化財を調査することで明らかにできないか検討していく。

3. 研究の方法

今回の研究では、立石寺の石造文化財について調査を完了し、最終成果を公開することを主たる課題とした。具体的な研究方法として、まず立石寺の未踏査の磨崖供養碑、石塔、石燈籠に関して、精緻なデータを収集する方針のもと、調査に入った。未踏査のもののみならず、既調査分についても確認・追加作業をおこない、より詳細なデータを収集する。なお、調査においては、山形大学の学生を中心として、十分な事前学習をふまえて現地において、悉皆調査を行うこととした。

こうして得られた立石寺の石造文化財データについて、その特徴をより鮮明に解明するため東北地方の他霊場のそれと比較することとした。対象とする霊場の条件としては、立石寺と同時代に存在し、同じような規模の霊場であり、庶民の信仰を集めた場所で、かつ石造文化財が一定量存在し、同じ性質の資料で比較検討が可能であることである。選定したのは、松島(雄島・瑞巖寺)と出羽三山であり、この2か所の既存の調査データのみならず、必要に応じて研究代表者が石造文化財の現地調査をおこなった。また、全国の庶民信仰の霊場について現地踏査をおこない、より広域に石造文化財のあり方等についての知見を得ていった。

なお、立石寺が地域における重要な観光資源であることを考慮し、研究成果を報告書刊行や学会で発表するのみならず、地域の博物館等の場で広く一般向けにも公開することも目標とした。調査中は立石寺住職・清原正田氏はじめ、関係者と密な連絡を取りながら進めた。

4. 研究成果

(1) 立石寺の石造文化財の悉皆調査について

2018年の調査では、せみ塚向かいの磨崖供養碑に新たに「上山」の文字が刻まれていることを確認した。従来、現在の山形市内より南に位置する地名は、磨崖供養碑上には発見されていなかった。立石寺の信仰圏の広がりに関する新たな資料を得ることができた。

2019年度の調査では、弥陀洞地区で1例ながら「市村屋」と屋号が刻まれたものを解読した。屋号の確認は、立石寺山内では初めてとなる。以上のように、再調査分も含めて、石造文化財の建立者層や庶民信仰の実態に迫る資料を得ることができた。

しかし、2019年12月以降の新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、立石寺山内での学生を動員した悉皆調査は断念せざるを得なくなった。研究期間を延長したが、結果として悉皆調

査を完了することはできなかった。

(2) 比較対象霊場の踏査

立石寺と比較する霊場調査については、本研究で立石寺において磨崖供養碑に屋号が発見されたこととともない、松島・雄島の石造文化財に見える屋号を抽出した。その年代や他の銘文内容、形式に差異がみられ、建立者の違いが浮かび上がってきた。また、出羽三山に関しては、西川町本道寺地区の石造文化財のデータとの比較を積極的におこなった。その結果、立石寺との信仰圏の広がり・時期的な違いが明確に見え始めている。

また、これまでは東北地方の霊地・霊場での調査を主体としてきたが、本研究の総括段階が近付いたことを念頭におき、遠隔地のフィールドについても新たに踏査を開始した。特に研究期間の後半においてはコロナ禍のなか学生たちとの悉皆調査が困難になった。感染状況が落ち着いた時期を見計らい、研究代表者が積極的に各地の霊場の踏査をおこなった。従来以上に全国の霊場に調査範囲を拡大した結果、立石寺や松島のように、近世期において磨崖供養碑が多数造営される霊場の事例は、ほとんどないとの様相が、ほぼ明らかになった。こうした点について、地域的な特徴と捉えるべきか、造営活動の背景に共通した背景があるのかなど、改めて検討する必要性を発見する機会となった。今後も、広く「参詣」の意味から、霊場・立石寺との比較・考察が可能な各地の霊場について現地踏査していきたいと考えている。

(3) 成果報告

成果報告に関しては、国内外に向けて活発におこなった。学会発表については、2018年2月9日に東北大学でおこなわれた「列島の霊場 - 聖なる地の誕生の物語 -」において「考古学からみた霊場・山寺立石寺の成立と変遷」と題して、本年度の調査成果を含めて発表した。特に、海外から日本の庶民信仰についての関心が高く、石へ刻まれた信仰資料が現代にいたるまで膨大に存在すること自体、日本の霊場の大きな特徴ではという指摘を受けた。本研究の発信の重要性を強く感じた。

また、2019年8月31日(土)~9月2日(月)、日本山岳修験学会・第40回山寺立石寺学術大会を山形大学で開催した。成果について発信すると共に、多くの研究者との意見交換のもと、有益な情報を多く得ることができた。特に2日目の個別発表の場では、立石寺中興とされる円海や、古代、中世からの立石寺の変遷画期における現状での問題点、近世期に類似の様相を有する天台宗霊場の事例など、貴重な所見を得ることができた。

なお、西川町本道寺地区での講習会や鳥海山・飛鳥ジオパークでの研修会など、県内での交流・普及も兼ねた学習会などの機会を積極的に得て、地域への情報発信を活発に行った。なお、本道寺は出羽三山の登拝口のひとつであり、立石寺とは直接関係しないものの、関東地方とのつながりや、近隣の霊場に参詣する行為と遠隔地からの参拝の違いについてなど、今後の課題が浮かび上がってきた。

論文発表に関しては、新発見のデータをもとに立石寺を中心におこなったが、今回の研究で立石寺の悉皆調査が終了しなかったことで、他霊場との比較内容について出せなかった部分もある。立石寺をフィールドとした調査・研究は、石造文化財の建立者や背景に存在した宗教集団の解明に視点に重点をうつしながら、引き続き継続していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 荒木志伸	4. 巻 66
2. 論文標題 山寺の石造文化財	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山岳修験	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒木志伸	4. 巻 33
2. 論文標題 立石寺の磨崖供養碑にみえる地名について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 村山民俗	6. 最初と最後の頁 48-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 荒木志伸
2. 発表標題 山寺の石造文化財
3. 学会等名 第40回日本山岳修験学会 山寺立石寺学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒木志伸
2. 発表標題 考古学からみた霊場・山寺立石寺の成立と変遷
3. 学会等名 列島の霊場 - 聖なる地の誕生の物語 -
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------